

計画

- [ブニ・ゾム山
群概説](#)

- [計画](#)

行動記録

- [日程](#)
- [登山記録](#)

報告

- [装備](#)
- [医療](#)
- [食料](#)
- [渉外](#)
- [会計](#)

紀行文

- [清水](#)
- [田中](#)
- [三瓶](#)

研究

- [研究](#)
- [研究](#)

ヒンズークシュ登山報告書

ブニ-ゾム峰(6551m)西面

1995, 7, 24 8, 31

Report of mountaineering in Hindu Kush

West face of Buni-Zom(6551m)

24 July 31 August 1995

Published Nov.30, 1996 (HTML version Mar.22, 1998)

序

北大山岳部部長 西信三

北大山岳部若手O・B・及び現役山岳部員によって構成された、北海道山岳部ヒンズークシュ遠征隊1995が、無事遠征を終えた事は大変喜ばしいことである。本遠征では、惜しくもブニ・ゾム本峰6551mの登頂はのがしたものの、北峰6338mへは、隊員全員が登頂を果たした。この成功はリーダーをはじめとする隊員諸君の日頃の肉体的・精神的鍛錬と今回の遠征の為の周到な準備の結果であり、その努力に敬意を表したい。

本遠征について要領よく簡潔にまとめた本報告書が官界刊行され遠征が完了する事となった。

今回の遠征は、ヒマラヤ経験の少ない若いメンバーで構成された隊での遠征の成功であり、北峰への登頂という成果は評価に値する。これは、本遠征の母体となった山岳部全体の日々の活動の水準の高さを示すものであり、後に続く隊が続出する事を期待する。

遠征に関し、御指導、御助言、御援助を下された北大山の会会員諸氏をはじめ関係各位に厚く御礼申し上げたい。

1996年8月

登山隊メンバー

齋藤清克 (26) リーダー・登攀 北大理学部地鋳大学院研究生

今回の遠征の言いだしっぺ。現地での交渉、登山活動、全ての活動に於ける中心人物。この遠征後、中国へ一人旅立ったが、集団で襲われ持ち物を全て奪われるというスリリングな経験をしたらしい。

本多和茂 (24) アシスタントリーダー・医療 専修大学北海道短期大学講師

行く先々での植物の観察、写真撮影を怠らない勉強家。その容貌がパキスタン人好みなのか、何故か現地の人々に人気があった。ベースキャンプでのトランプではさんざんカモられていた。

清水徹 (24) 会計・渉外 北大工学部精密工学大学院修士2年

高地では至って健康、何故か街では体調を崩す男。ブリーフィングの当日、イスラマバードでけいれんを起こし病院へかつぎ込まれ、下山後のギルギットでは街の中でぶったおれ、タクシーの運ちゃんに拾われホテルに運ばれた。

辺見悟 (22) 食糧・装備 北大教養2年

唯一人の現役。今回の遠征のために食費を切り詰めたために、出発前の健康診断で栄養失調と診断された。登山活動後にいらなくなった装備を配った際、彼の汚いジャンパーは失笑の的となり、それを欲しがる現地人はいなかった。

三瓶修 (26) 装備 北大山の会会員

大阪在住の会社員。

田中健太郎 (26) 記録 北大山の会会員

大阪在住の会社員。

JAVAID IQUVAL リエゾン・オフィサー

気配りの細かい、たいへん親切な紳士。リエゾンに振り回されるのではないかと、我々の心配は全くの杞憂に終わった。ベースキャンプでは毎日お祈りをする熱心なムスリム教徒。

MOHAMMAD FAQIR コック

街では食糧・装備の調達を手伝い、ベースキャンプでは、いつもうまい飯を作ってくれた。我々の入国から、出国までずっと我々と行動を共にし、いろいろ相談に応じてくれて頼りになった。

GULZEER KAHN キッチンボーイ

キャラバン、ベースキャンプでの雑事を引き受けてくれた。いつもニコニコしていて大変気のいい男。現地ですてきな羊や鶏を上手にさばってくれた。下山後、彼の家に招いてくれて、ご馳走を振る舞ってくれた。

ALI ガイド

キャラバンを我々と共にしてくれ、ジープやポータの手配をしてくれた。髭もじゃの大男で見た目は恐そうに見えるが、接してみると笑顔の優しい気持ちの良い青年。悪路でのジープのハンドル捌きはうまい。

1 . ブニ-ゾム山群概説 (斎藤)

ブニ・ゾム山群はパキスタン、チトラル地方の北東に位置し、マストウジ川とラスポール川に囲まれた山群で広義のヒンズークシュ山脈の一山塊を構成している。本山塊は6551mのブニ-ゾム主峰を盟主に、北にブニ-ゾム北峰(6338m)、南に南峰(6220m)その他10座の6000m峰を擁する独立した山群と考えてよい。ちなみに主峰は麓の村や谷筋、峠のアプローチからでは姿を現さず、南側の氷河を奥深くつめて行かないと見えない。周囲を6000m級の自然の城塞がとり囲んでいるというわけだ。一方、チトラルからギルギットを結ぶ道は古くからシャンドゥール街道として知られていた為に、ヒンズークシュ山脈の登山史上で早くからこの山域は探られていた。主峰は1938年イギリスのJ. フィンチ、'40年M. ホワイトが試登。'57年ニュージーランドのW. ベリーが初登頂。'75年日本のベルニナ隊が南壁から第2登している。北峰は'65年オーストリア隊が初登後、'71年日本の富山雄山高校OB隊が第2登している。'71年には日本隊が滑落、遭難事故を起こしている。

主峰へのルートとしてはいろいろとられているが、東面のゴールドハン氷河側は雪、岩壁の状態が悪く、西面のコーラボルト氷河側はまず、約500mのクラクマリの滝を越えなければならない。さらにその上部は1000m以上ある西壁となって突き上げている。また北面ブニ・ゴルからは脆い断崖と北峰を越える必要がある。そのため多くの隊がこれらに労力を費やし、また阻まれ主峰を断念している。

参考

- 主峰の位置 [36° 09'N, 72° 19'E]
- コンサイス外国山名辞典, 三省堂
- 世界山岳地図集成カラコルム編, 学研, 1978

2 . 山行計画 (斎藤)

計画

- ・ 登山隊の名称 : 1995 Academic Alpine Club of Hokkaido, Buni-Zom Expedition
- ・ 目標とする山 : ブニ・ゾム主峰 (6551m)
- ・ 登攀ルート : コーラボルト氷河を最奥までつめ、主峰と北峰とのコルに出て北方稜線経由で往復
- ・ キャンプ位置 : ベースキャンプ (BC) の他に C 1 - C 3 の3つの上部キャンプを設置する。
BCはクラクマリ滝岩壁下、C 1はクラクマリ滝岩壁を越えたコーラボルト氷河末端、C 2はコーラボルト氷河上、C 3は氷河をつめきったところの主峰と北峰とのコル付近とする。

ルート工作

C 1 C 2間の標高4000m前後のクラクマリ滝岩壁、C 3を設置するコルに至る急な懸垂氷河 (5500 6000m) 及び、C 3 主峰間の稜線 (6200m前後) を技術的に困難な箇所ととらえていた。なかでも、1971年に日本のスワロー会が途中で断念した急な雪壁の登攀に重点を置いた。

これらの岩壁、懸垂氷河については登降の安全を確保するため、急な箇所にロープを固定する。そのためのフィックスロープは各200m、計400mを用意する。支点はロックピトン、アイススクリュウを中心とする。

C 3 主峰間の稜線 (北稜と呼ぶ) は1957年のニュージーランド隊の初登頂以来記録がなく、また初登頂の記録も詳細には不明なところがある。彼らは東面のゴールドハン氷河を経由しているため、西面からのアプローチには未知の要素が多い。我々は1971年に日本のスワロー会が撮影した西面からの写真と、1968年に法政大学体育会山岳部の撮影した東面からの写真の両側からの写真から想像して、北稜のルートは部分的に岩が混じるが概ね細い雪稜が続き、我々の技量でも大丈夫であろうと判断した。

全般的にフィックスロープは必要最小限におさえ、個人の技術、判断を重視したスピーディーな登攀を目指した。そのためには次に述べる高度順化を確実にすることが最重要と考えた。

高度順化

全体を3期に分け、一期目を4000m台の岩壁の登降、二期目を5500 6000mの懸垂氷河の登降。その都度、荷揚げをまじえて登降を数度繰り返すことによって次第に高度に慣れる。これらの間に丸2日のBCでの完全休養を入れ、順化をより確実なものとする。

3期目に2隊に分け順次登頂。約21日間で登山を終了する。今回のルートは一般に高度順化の「壁」といわれる4000m、6000m前後に急な登りがあり、短時間で高度を稼げることがスムーズな高度順化につながると考えた。

行動記録 - 日程 - (齋藤、田中、本多)

- 7月17日 先発隊(齋藤、清水)出発
7月24日 残りのメンバー(本多、辺見、三瓶、田中)出発
7月25～27日 ブリーフィング、買い出し、パッキング
7月28日 イスラマバード～チトラル(チャーター・バス)
7月29日 チトラルで休養
7月30日 チトラル～パルガム(ジープ)
7月31日 パルガム～ゴールドハン氷河下(Co3800)
キャラバン1日目
8月1日 ゴールドハン氷河下～
コーラボルト氷河末端クラクマリ滝下B・C.
(Co4000)
8月2～22日 登山期間
(8月22日 三瓶帰国)
8月23日 B・C.～パルガム
8月24日 マスツージ、チュンジ訪問(ジープ)
8月25日 パルガム～パンダール(ジープ)
8月26日 パンダール～ギルギット(ジープ)
8月27日 ギルギット～フンザ観光(チャーター・バス)
8月28日 フンザ～ギルギット(チャーター・バス)
8月29日 ギルギット～ベシャーン(チャーター・バス)
8月30日 ベシャーン～イスラマバード(チャーター・バス)
8月31日 ディブブリーフィング
9月1日 本多帰国
9月4日 清水、辺見、田中帰国
齋藤シルクロードへ旅立つ

行動記録 - 登山記録 - (齋藤、田中、本多)

8月2日；晴れ

朝から、クラクマリ岩壁のルート工作。ルートは岩壁帯に向かって左側にあるハンク状の涸れ滝の左側にある、右上するバンド。1ピッチ目、田中が階段状の所を15メートル登る(III~IV級)。次に齋藤がトップで登ると、8メートル程の微妙なトラバースがあり、その上のかぶり気味の所を越し、浮石の多いルンゼを10メートルを登ると岩峰の頭状の所に出た(~ 級)。ザイルを外して、そこから60メートル登ると急なガレに出た。ここでいったん引き返した。2ピッチ目の終了点にハーケン、及び岩角にて支点をとり、1ピッチ目の終了点までまっすぐに下りるルートをアップザイレンした(20メートル)。1ピッチ目は登りと同じルートをアップザイレン。

BCで昼食をとった後、午後は田中、三瓶でルート工作。午前中に登ったルートを登り返し、フィックスロープを固定する。安全に、スムーズに荷揚げが出来るように2ピッチ目の上もずっとロープを固定する。田中がロープの固定作業を行う間に、三瓶が上のガレの上を偵察する。

他の隊員は岩場の取付きまで荷揚げをおこなう。

8月3日；晴れ夕
方風強し。

齋藤、田中、辺見にてガレを登る。ガレと右側の岩とのコンタクトライン沿いを200メートル程登ると、上をふさぐ様にして岩が現れた。そこでザイルを出して40メートル程右上した。そこから200メートルほど登ると、延々と続くガレにたどり着いた。

その後、齋藤、辺見の2人は、そのガレを登りコーラボルト氷河の舌端のC1予定地まで偵察した。他の隊員は岩壁の荷揚げ。

8月4日；小雨の
ち曇り。

全員で岩壁を荷揚げ。その後、コーラボルト氷河末端にC1設置(4750m)。齋藤、三瓶で氷河の偵察を行うが、とても歩きやすい氷河でびっくりする。

8月5日；雨のち
曇りのち晴れ。

全員でC1への荷揚げの後、各自5000mまで高度順化のために氷河を登る。全員、C1に泊まる。氷河の上に月がポツカリと浮かび、月見をする。

8月6日；晴れ。

全員でコーラボルト氷河を登り、氷河途中の5120mにC2を設置。ここまで来るとブニゾムの主峰、北峰が正面に見え、谷を隔てた向こうにティリチ

ミール、イストル・オ・ナールの7000m級の山岳が望める。この日のうちにBCまで下り、翌日から2日間を休養とする。

8月7日；晴れ夕
方風強し。

氷河の濁流で服や身体の洗濯をして、後は終日、読書やトランプばかりで過ごす。リエゾンの祈りの雄たけびが荒涼とした谷間にひびきわたる。

8月8日；早朝雨
後晴れ。

完全休養2日目。

8月9日；晴れ気
温低し。

全員でC1へ移動。

8月10日；晴
れ。

全員でC2まで荷揚げをしてそのまま泊まる。

8月11日；晴れ
午後みぞれ降る。

C3に至る氷河源頭部、核心の懸垂氷河にルート工作。フィックスロープを引きずりながら、辺見がトップで登る。氷壁の傾斜は 40° ～ 60° 。アイゼンは良く利くが、ピッケルやアイスハーケンを深く刺そうとすると氷が割れる。アイススクリュースは良く利いて安心できる。この日、コルまでは到達しなかったが、氷河上にC3設営ポイント(5900m)を見つける。ここまでフィックスロープや6ミリロープなど300メートルをフィックスした。

午後になり気温が高くなると、氷の上を水が滝のように流れ出す。午前中にセットしたアイススクリュースなども手で簡単に抜けてしまうくらい、ゆるんでくる。再び、セットし直ししながら、氷壁を下る。C2に戻って泊まる。

8月12日；快
晴。

全員で懸垂氷河を登る。フィックスロープは夜の中に凍って、氷壁に張り付いている。それをばりばりと氷壁からはがして、ロープに付いた氷を落としながらユマーリングする。氷河上のベルクシュルントをテラス状に削ってC3を設置する。右方で切れ落ちるブニゾムの北西壁は絶望的な岩壁だ。目指す主峰の北稜は雪のリッジが上部まで続いており、登攀可能な様相を呈している。只、予想以上に細く、手強そうだ。反対側の北峰へは雪面をたどって楽に登れるだろうと確信する。午後になると強烈な紫外線を伴う直射日光にさらされる。笑えば唇が割れ、血がしたたる。全員が軽い日射病気味だ。比較的元気な

齋藤、三瓶、辺見がC 3に泊り、明日、主峰の試登を行うことにする。ただし、クライミングロープをクラクマリ滝岩壁で余計に使っているため、手持ちが少なく、フリーで行けるだけ試みて、だめなら頂上直下のルートの偵察をした後、一旦コルに戻って北峰に登頂する作戦とした。本多、清水、田中はC 2まで引き返した。

8月13日；快晴。

齋藤と三瓶と辺見はC 3から懸垂氷河を抜け、予定通り主峰への稜線に取り付く。ルートは両側が切れ落ちた細いリッジが続き、左側に雪庇が大きく2、3m張り出している。右側は風化した花崗岩が、数本の急角度のガリーを伴い、下方の氷河まで切れ落ちている。

稜上はカニの横ばいのごとく雪庇の反対側の雪面のトラヴァースと直上の繰り返しで進んでいく。6100mに入った地点でややラッセルがでてきたと思った瞬間、3人ののった足元の雪面にドスツという音とともに亀裂が入る。気持ちが悪くなって一目散に引き返してしまった。主峰へのルートはその先も岩の混じった細いリッジが続いており、次のアタックは帰りのことを考えて手持ちのロープが100mは必要だ、いや、この状態じゃ雪庇側の深雪をまくのは危険だ、そもそもこんな厳しいと思わなかったぞ、やっぱりリーダーにだまされた、などと話しながら目を反対に向け、北峰に転進。

一旦コルに戻ってから北峰へは傾斜の緩い、氷化したペニテントスノー状の上にアイゼンを利かせ、ひたすら登る。時分、北峰に登頂。眼下にマスツージ川に沿う緩やかな波状地形が広がった。カラコルム、ヒンズークシュの展望を楽しむ。北峰登頂隊はその日のうちにC 1に下りる。

この日、本多、清水、田中はC 2にて待機。田中は暇なのでC 2周辺の小ピーク（パノラマピーク；5700m）に単独で登った。ピークには錆びたピッケルが残置されていた。終日快晴であった。

8月14日；快晴。

C 2から本多、田中、清水が北峰に向かった。齋藤、三瓶、辺見はC 1からC 2へ食糧を荷揚げし、そのまま待機した。本多、田中、清水は14時北峰登頂。しかし下降途中で本多に高山病の初期症状が現われ、大分遅れた。そのままC 3に着いて横になると動けなくなった。田中、清水はC 2に待機していた齋藤らと無線で連絡をとり、相談の結果、とにかく今日中に無理にでも降ろして下の氷河上に泊まらせることとし、三瓶、辺見がサポートに向かった。本多は田中、清水の協力で懸垂氷河のフィックスロープをつたって下降を繰り返し、日の暮れた頃、下の氷河に降り立った。そこでしばらく休養している間に、本多の病状も回復し普通に動けるようになり、全員C 2まで戻った。

8月15日；晴れ。

全員がBCに戻り、2日間の完全休養に入る。

8月16日；晴れ
後曇り一時雨。

BCで休養。パルガム村の男達が野菜、羊、鶏を売りにやってきた。

8月17日；曇り
時々晴れ。

BCで休養。最後の攻撃に備える。

8月18日；晴れ
時々曇り。

斎藤・本多・辺見はC2へ。田中・清水はC1へ。三瓶は会社の休暇の都合があり、翌日一人で下山、帰国の途についた。クラクマリ滝岩壁のフィックスロープを数本回収し、頂上攻撃のために持っていく。この日、C2直前で辺見がヒドゥンクレバスを踏み抜いて10m落ちる。その時すでにC2に到着していた斎藤・本多に辺見のおたけびが偶然にも届き、ザイルで救助される。幸い尻の軽い打撲ですんだ。この氷河はクラックなどの障害が少なく歩きやすいとはいえ、侮りすぎたと反省。以後このようなことのないように互いに監視できる距離で行動することを決めた。

8月19日；快晴
後曇り。

斎藤・本多・辺見は、C3へ。強い日差しのために懸垂氷河のフィックスロープの支点は全て緩んで一部は完全に外れていた。それらを再び打ち直して登る。田中・清水はC2へ。

8月20日；晴
れ。

斎藤・本多・辺見は、主峰へ延びる尾根に再び取り付いた。前回の到達点を越え、核心部の登攀に入る。高度を上げるにつれ深雪となり、膝までもぐるブレイカブルスノー。重い軟雪を膝で押して足を踏み出す繰り返し。急なナイフリッジには締まりのない雪がついており、手で払いのけて這うように進む。ルートは6400m地点にちょっとしたピナクルと岩稜帯がある。岩稜を忠実にたどるのは技術的に難しく、我々にはゴールドハン氷河側の雪壁をトラバースして直上するルートしか選択はなかったが、その抜け口の雪面上部には雪庇が発達し、亀裂が走っている。これより先のルート全体に雪崩の危険性を感じ、ここで引き返しを判断する。ピークがすぐ目の前に見えるのが残念だがここはあっさりと降参することにする。一方で、我々の技術で良くここまでこれたとも思う。帰りもこれまでの緊張感を維持するため、暫し休憩するため狭いリッジに腰を下ろした。乾ききった喉に紅茶を流し込んだ。

上部の雪質の状況は、表面がうすいサンクラスト。内部は足で踏むことにより10?cm程の深さのステップができるが、荒いザラメ雪できわめて崩れ易い。降雪からおそらく5?日目である。さらに、下部の緩傾斜の部分に比べ、ザラメ化が激しく異なっていた。

サポートで上がってきた田中、清水と無事にC3で合流し、C3を撤収。全員で懸垂氷河のフィックスロープを撤収しながら下る。C2に着く頃には暗く

なっていた。暗い夜空に、どこかでどんぱちやっているらしい爆弾の閃光が遠くに見えた。

8月22日；晴れ。

朝、ゴミを燃やして、山を眺めてゆっくり出発。重荷のため全員がヨロヨロしている。クラクマリ滝岩壁下にはコックのファキールとゴルザールが迎えにきてくれた。BCに着いてホッと一息。

8月22日；晴れ時々曇り。

前日撤収できなかったクラクマリ滝岩壁ルート全ての登攀具を回収し、登山活動を終了した。

装備報告 (辺見)

Contents

共同装備についての解説

1. [個人装備](#)
 2. [登攀装備](#)
 3. [露営装備](#)
 4. [その他装備](#)
-
5. [梱包リスト](#)
-

1 . 個人装備

個人装備は、道内で使用する積雪期装備を用いた。日中の行動はジャージで十分であるが、朝晩はやはり冷えるので、冬の装備を持って行くに越したことはない。

その他、各自アイスパイルを持参し、氷壁や稜線上の登攀に非常に有効であった。

[\[ページのトップへ\]](#)

2 . 登攀装備

ルート工作用に、9ミリのクライミングザイル4本を用意した。3人ずつの2パーティに分けてルート工作したので、十分な量であった。

フィックスロープは、ダンライン(9ミリ, 8ミリ)をそれぞれ200メートル、計400メートル用意した。主にクラクマリ滝岩壁と懸垂氷河の氷壁に使用した。C2以上でのフィックス箇所が計画より増えたので、足りなくなった分は、岩壁部のロープを回収することで補った。

クラクマリ滝岩壁のフィックスロープは、ユマーリングの際の損傷を防ぐ為、随時ガムテープを捲いて補強を行った。

その他、サブザイルとして 6ミリ×20メートルのロープを2本用意した。フィックスロープ代わりに1本、もう1本はタックパーティが非常用ザイルとして、使用した。

支点類は、ロックピトン、アイススクリュウを中心に各種揃えた。ほぼ十分な量であったが、氷壁の部分はアイススクリュウのみしか使用できなかった。

新雪用にスノーバーは、4mm×40mm×40mm×660mmのものを自作し持参した。雪との摩擦を大きくするために、穴をあけたり、くさびを入れたり工夫をしたが、今回は使用する局面がなかった。全体としてロックピトン、アイススクリュウのみで殆ど用を果たした。

[\[ページのトップへ\]](#)

3 . 露営装備

ハイキャンプのテントは全てドームテントで、C 1 に 4 人用と 2 人用、C 2 に 4 人用、C 3 に 3 人用を配置した。普段、道内で使用するものを持参したが、天候が良いため、不安を覚えることはなかった。隊員数が 6 名なので、C 3 建設前は、C 1、C 2 に全隊員が泊まれ、C 3 に泊まるアタックパーティを 2 パーティに分けたので、この量で十分であった。

BC は、エージェント持参の隊員用 2 人用テント 3 張、他リエゾン用テント、キッチンテント、メステント、コック用テントが 1 張ずつという構成であった。

C 1 以上では、ガスストーブを使用した。特に支障になるようなことはなかった。

ガスカートリッジは、現地のエージェントを通してイギリスの会社より購入した。消費量は、C 1、C 2 で水が取れたため計画より遥かに少ない量で済んだ。

一応、何かあったときのために、石油ストーブを持って行ったが、ガスカートリッジが予定通りに手に入り、使用することはなかった。

炊事用具は、3 人単位で、ジフィーズ、ラーメンを主体とした食事だったので、小さいコッヘルセットで十分であった。スノーソー、スコップは C 3 設営時に使用した。

ローソクは、日が長かったのでハイキャンプでは使用しなかった。

[\[ページのトップへ\]](#)

4 . その他の装備

梱包材は、日本からの輸送にはプラパールとダンボールを、キャラバン中にはこれに加えて麻袋を使用した。空輸時には各装備を分散させたり、ビニールに包むなどの防水対策を施した。

トランシーバーは、アイコム IC - P 2 (144MHz) を 4 台使用した。軽く、コンパクトで性能が良く使いやすかった。

高度計は正確ではなかったが、ある程度の目安となり、気圧の上下がわかるので、天候の予測にも役にたった。

デポ旗は、針金に赤布をつけたものを作成したが、使用する機会はなかった。

食料等のパッキング用ビニール袋、輪ゴム、ガムテープは日本から持ち込んで正解であった。現地のは劣化が早く、よく切れた。

リエゾンの装備は、隊員と同等の装備を支給した。ポーターには支給する必要はない。

[\[ページのトップへ\]](#)

Contents

1. [基本方針](#)
2. [実際の経過](#)
3. [総括](#)
4. [参考図書](#)

1. 基本方針

今回の登山隊は、医師が参加しない隊であることを踏まえたうえで、以下の項目を柱とし、隊員の健康管理を考えることにした。

a) 高山病対策

高山病に対するパーティの共通の認識を持つため、起こりうる高所での症状とその対処方法について、登山の医学1)、高所医学2)、高みをめざせ/高所への挑戦の物語3)を参考に各自に出発前に目を通してもらった。また実際の高度障害について、遠征経験のある医師から話を聞き、知識を深めるよう努めた。高山病の対処は、投薬ではなく、高度を下げることを基本とした。

高山病について医療担当がまとめた項目は、高度馴化についておよび急性登山病(やや高所)、高所肺水腫(高所)、高所脳浮腫、高所網膜出血(極めて高所)についてである。

また、高所での活動では平地以上に、体内の水分を必要とすることがわかっており、その対策として、行動中は各自水筒を携帯し、休憩の際など常に水分を補給するよう努めた。特に今回は、医師のアドバイスと大塚製薬の御協力により、速やかに体内に吸収されるスポーツドリンク「ポカリスウェット」を多用し水分の補給に務めた。また高所での食事は、一般に塩分を控えることとされているが、これについては、各自の好みの問題もあり、特に意識して対策はとらなかった。

b) その他の病気の対策

考えられる病気について(特に下痢)、遠征経験のある医師と相談し、その症状と対処方法について教わった。

c) 事前の対策

遠征出発前に、各自精密検査を行った。また、予防接種はA型肝炎(乾燥ワクチン:チバ)、破傷風について行った。

d) 薬品、医療器具リストの作成と、梱包および使用法の検討

実際に登山隊に参加したことがある医師との共同作業で行った。尚実際に携行した薬品および医療器具のリストを表1に示した。これらの薬品、医療器具を2パック用意し、各々のパックをさらに、腹痛・下痢・胃腸薬、頭痛等高所関係、外傷関係の3つに分け、その場に応じて隊員が使用を誤ることのないよう配慮した。またさらに、個人で頻繁に使用すると考えられる下痢止め、虫刺され、外傷、高所での頭痛などの薬品は、上記の薬品パックとは別に個人用薬品

として人数分用意し各自が携行した。このリストは表2に示した。一方、今回ちょっとした試みとして、スポーツ選手らに用いられる鼻孔拡張テープを携行した。これは、鼻孔を広げることにより酸素吸入量をアップし運動能力を高める効果を期待したもので、今回の登山隊では高所において実際に使用しその効果を検討してみることにした。

e) 実際の隊員の健康管理

高所に入ってから、異常を事前に発見するため、健康チェックリストを作成し、各自が健康管理に努めるよう指導した。

・健康チェックリストの項目

体温、脈拍、呼吸数、尿・便回数、食欲の有無、睡眠、疲労（回復）、浮腫の有無。

また今回は、パルスオキシメーター：動脈血酸素飽和度測定装置（ミノルタ製PULSOX-5）を携行しSpO₂（動脈血中酸素飽和度）を随時測定し、各自の健康管理および高所順応に役立てる試みを行った。

[\[ページのトップへ\]](#)

2. 実際の経過

～ニューデリーからB.C.まで～

生水を禁止し、のどの渇きは、お茶やミネラルウォーターで補った。また外食の際は、生野菜等、火の通っていないものは自粛するよう心がけた。しかし、やはり風土の違う異国の地、気を付けてはいてもやはり多かれ少なかれ下痢の症状を訴える隊員はいた。ビオフェルミン、フェロベリンAを使用。この下痢はこの後も期間を通じて良くなったり再発したりの繰り返しであった。幸い高熱を伴う悪性の細菌による下痢と思われるものは発生しなかった。

また移動中、ロータン・パス（3978m）、バララチャ・ラ（4891m）、タグラン・ラ（5300m）といった標高の高い峠越えがあり、また途中滞在する町もマナリ（1830m）、ジスパ（3142m）、レー（3500m）と高所であり計画段階から高度障害に対する心配が指摘されていた。実際、この高所に伴う不調を訴える隊員がでた。以下にその経過を記す。

7月20日、マナリからロータンパスを越えジスパに入る。夕食時、小倉が食欲不振と頭痛を訴える。PLとセデスを投与、十分な水分補給をし休養するように指示する。その後小倉は回復し特に症状の悪化はみられなかった。

7月21日、レー到着、夕方、野入が頭痛を訴える。疲れもありPL、セデス投与。

7月22日、レー到着の次の日の朝、野入が不調で起きられず、PL、セデス投与し夕方回復。この日は、高所順応をかねた休養日で各自少し外を歩いて順応をしようという日であったが、回復後行動した野入は、かえってそれがオーバーワークになったかホテルに帰着後、再び頭痛を訴え寝込む。食欲もなく体力の消耗が危惧されたため、PL、セデスを投与し、とにかくお茶、フルーツジュース等飲み物で水分と栄養の補給をするよう指示した。次の日も野入は不調を訴え寝込んでいたがこのときパルスオキシメーターのSpO₂の値は50前後と低く、明らかに高度障害と思われた。

7月24日、レーからカルギルへの移動。この間は標高がどんどん低くなる移動

であるため野入の体調の回復が期待された。案の定、この移動中に彼の体調は回復し食欲も回復していった。

～登山期間中～

この登山期間中、7月28日から各自パルスオキシメーターにより脈拍数、SpO₂の値を記録してもらい体調管理に役立てることとした。測定は、最もそのときの体調を反映したデータが得られるとされる4)起床後まもない時間帯に、シュラフに入ったままの臥位の状態でいった。本期間中のこれらの値の推移を図1および図2に示した。この結果から脈拍数については、個人差はみられるものの、全体としてはB.C.休養時には少なく、高所滞在時には多くなる傾向がみられた。またSpO₂の値については、滞在する高度との関連がより顕著であった。すなわち高所滞在中はSpO₂の値は低くなり、B.C.に近づくとつれこの値は高くなった。

以上の結果をふまえ実際の行動の経過および気づいた点を以下に示す。

- 登山期間中多かれ少なかれ隊員は頭痛を訴えたが、この頭痛を抑えるのにセデスは非常に効果が高かった。
- 登山期間前半、本多は他の隊員よりSpO₂の値が低く、特に8月4日、それまでの荷上げルート工作等で疲れもあり風邪気味であった。また8月5日、B.C.休養日1日目の朝は、顔がむくむ浮腫の症状が現れた。そのため利尿剤であるラシックスを投与した。その後、休養期間中に直ちにこの症状は改善され、それと平行するようにSpO₂の値は上昇していている。このことからこのSpO₂の値は、高所順応の程度や体調を非常に良く反映していたと思われる。一方、幸いにして他の隊員については、対処を必要とされるような重度の高度障害は期間を通じてみられなかった。
- また、全体的にみると、C2建設後のB.C.での休養を境に、全体員にSpO₂の上昇がみられ、一方C3建設とC3入り、つまり6000mを境に再びSpO₂の低下がみられた。またアタック成功後下山に伴いSpO₂の値は上昇し、最終的にB.C.に着いた時点での値はおよそ一ヶ月前B.C.入りした時に比べSpO₂の値は全ての隊員において高くなった。このことからこのSpO₂の値は、滞在した標高と顕著な関連をもち、またB.C.入りした日よりB.C.に帰ってきたときのSpO₂の値が高いことから、その高所への順応を如実に反映しているものと思われた。
- また、鼻孔拡張テープについては、数人の隊員が行動中に使用してみたが、慣れないためか装着していると非常にうっとうしく、汗をかくことによりいつのまにかはがれてなくなっていた。そのため高所順応あるいは高所での行動への効果は把握できなかった。

～下山から帰国まで～

登山活動中、特に大きな怪我もなく、全員無事に下山した。

下山後は、全員登頂の喜びからか、立ち寄った町々で暴飲暴食をしたため、食べ過ぎによる腹痛をおこすものが目立った。症状がひどい場合には前出の薬の他にロペミンも投与した。

特に野入は、下山後の移動中にも不調を訴えることが多く、何度か嘔吐していた。長い遠征での緊張や疲れもあったのであろう。幸いここでも高熱を伴って長期にわたり苦しむ悪性の細菌による下痢はみられなかった。

[\[ページのトップへ\]](#)

3.総括

1) 健康管理について

インド入国後、隊員全員が、下痢をした。これは日本との食生活の違い、あるいは良く言われることだが、水の違いで、ある程度は避けようがないと考えられる(いくら生物、生水を口にしないとしても)。ただこの症状が、悪化したり長期化すると、やはり消耗であり、それを軽減するために、薬品は必携であろう。一方、細菌性の下痢や病気は、かかるとやっかいであり、そのためには今回行ったような、事前の予防接種や、細心の注意は必要であろう。

2) 高所での体調管理について

また、高所での健康管理は、実際悪くなったら高度を下げるのが、一番の薬である。ただ非常に難しいのは、順化するペースが、隊員各自異なり、また経験がないとなかなか自分自身の体調も把握しにくいことではないかと考えられた。

今回の遠征では、比較的早い段階(デリーからB.C.への移動中)で、小倉、野入の二人はそれぞれ高度障害と思われる症状を訴えた。その後、B.C.入りして登山期間中は、本多が浮腫の症状がみられたぐらいで、隊全体としては大きく登山計画を遅らせるような高度障害はみられなかった。今回、本遠征が登頂までスムーズに計画が遂行されていった背景には、こうした早い段階での高度障害の発現と、移動中の低所から高所そしてまた低所といった峠越えのアプローチにより、各人の高度順化がB.C.に入るまである程度行われていったことがあると考えられる。

また、高度障害に伴う頭痛あるいは浮腫に対する薬品での対処については、それぞれ効果がみられる薬品があり、医師のアドバイスを受けた上で適切な使用をしていくことは高所へ遠征する上で重要であると思われた。高度障害の予防薬はなく、もちろん順化が一番であることは間違いがなく、効果があるとされているアセタゾラミド、ラシックスといった利尿剤は今回のように補助的に用いるのが良いと思われる(長期使用による副作用や薬効の個人差の判断の難しさから)。実際、本多は長期の浮腫に対して一度服用したが、服用後の効果はきわめて良好であった。

今回、実際に携行しその活用を試みたパルスオキシメーターは、前述の通り、そのときの体調や高所順応の程度を知る良い手がかりとなり、遠征に際して大きな効果を発揮するものと思われた。ただ高所では、パーティが別々のテントに寝泊まりする事がありパーティに1つしかない場合、起床後の受け渡し等の煩雑さを伴うため、今後より小型軽量で(今回携行したのは0.67kg) 価格的にも手に入りやすいパルスオキシメーターが開発され、将来は1人1人の個人装備となることが望ましいと考えられた。

また実際各個人のこのパルスオキシメーターによるSpO₂の値の変化について、山本、神尾らは、個人内の体調変化を捉えることには有効だが、個人間の体調の優劣を捉えることができるかどうかについては明確ではないと指摘している(5)。このことに関して、今回の遠征では確かに前者の個人内ではその体調変化が把握できるものの、個人間に対してはやはり隊員ごとに個人差があり、この差異をどう評価するかは、まだまだ検討の余地があると思われた。ただ、本遠征隊の隊員1人1人の、この高所での経験は、またさらなる遠征を行う際、なんらかの検討材料となることを期待したい。

最後に鼻孔拡張テープについてだが、これは前述の通り実際の使用にあたり

問題点が多く、事前の計画段階で、装着の不快感やその使い勝手について、実際に使用してみるなどの検討がまず必要であったであろう。また、事前の検討をしっかりと行った上で、実際高所での使用の効果を検討し、睡眠中の使用なども含めて、その効果についての実際のデータを蓄積していくことが今後の課題となろう。

3)遠征に持参した薬品およびその使用、梱包について

個々の持参した薬品のおおよその使用量と使用して気づいた点などを、表1および表2に付記した。このように今回の登山では、腹痛下痢関係と高所での頭痛薬を多く使用した。幸い外傷に関しては、靴擦れと軽い擦り傷程度であった。

今回の薬品は表の内容で1パック1.25kgであったが、その必要量については、有事の際を考えるとこのくらいあってもいいのではないだろうか。

[\[ページのトップへ\]](#)

4. 参考図書

1. 登山の医学 J.A. ウィルカーソン
 2. 高所医学 マイケル・ウォード
 3. 高みをめざせ/高所への挑戦の物語 チャールズ・S・ハウストン（岩と雪連載）
 4. 第6回北海道海外登山研究会参考資料 北海道海外登山研究会
 5. カンチェンジュンガ無酸素登山報告書 ガイア・アルパインクラブ
-

食料報告（辺見悟）

Contents

- [1. 基本方針](#)
- [2. 高地食について](#)
- [3. 行動食](#)
- [4. 調味料・お茶](#)
- [5. BC食](#)
- [6. 梱包](#)
- [7. 全体を通じて](#)

1. 基本方針

- 高地食、日本でしか手に入らない嗜好品、調味料のみ日本から持ち込む。
- それ以外の行動食、砂糖、粉ミルク等現地調達できるものは、現地調達する。
- 高地食は、高カロリー、高タンパク（高所登山には一般に、1人1日3500kcal、タンパク質80g必要とされる。）、軽量であること、簡単に調理できること、美味であることを基本に計画を立てた。計画した高地食のカロリー摂取量は上記を満たしていないが、特にこだわらず、不足分はBCで補うこととした。実際、この方法で行動に支障が出たとは思われないし、高所で食べられる量にも自ずと限界がある。
- 水分補給に関しては、1人1日3～4リットルを目標に、朝夕のお茶はもとより、各自行動中水筒（1リットル用）を携帯した。
- ビタミン不足については、ビタミン剤を服用した。

[\[ページのトップへ\]](#)

2. 高地食について

朝食は、ラーメン、うどん、そば。夕食は、ジフィーズとした。
朝食のめん類は、東洋水産株式会社寄贈のカップメンの中身を使用し、日光による変質を防ぐために紙袋に包みパッキングした。1人1日120グラムとして計算した。量としては、丁度よかった。
ジフィーズは、各種用意し、1人1食1袋（130グラム）で丁度良いくらいだった。味も各種揃えたので食べ飽きなかった。
副食として、水分補給を兼ねて、乾物（高野豆腐、ワカメ、ひじき等）を中心としたスープをつくった。

[\[ページのトップへ\]](#)

3 . 行動食

ビスケットが主体で、あとアメ、チョコレート、ナッツ類、ドライフルーツなどを付け加えた。ビスケットは、現地と日本とで値段は変わらない。

[\[ページのトップへ\]](#)

4 . 調味料、お茶セット

調味料は、基本的なものの他にマヨネーズ、しょうが、わさびのチューブをいれた。

他には流動食にもなる具入りのたまごスープを加えた。

調味料は、C 1、C 2 に各 1 つずつ備え付けた。

[\[ページのトップへ\]](#)

5 . B . C 食について

今回のコックは、遠征隊（日本隊含む）のコックとしての経験も多く、チャパティ、フライドライス（ヤキメシ）、オートミール等変化に富んだ食事を提供してくれた。

また、BC が人里から近いため、現地の人羊や鶏、アプリコット等を提供してくれ、非常にありがたかった。

嗜好品としての、味噌汁や漬物などの日本の味は、やはり人気を博した。

[\[ページのトップへ\]](#)

6 . 梱包について

高地食の梱包については、3 人パーティ 5 日分の食料とお茶セットを 1 つにパッキングした。これを C 1 , C 2 に、それぞれ 2 個ずつ荷揚げし、不足分はその都度パーティが各キャンプ間を持ち歩いた。高所での行動は、予定通りに行かないことが多いので、大まかでの荷揚げが良いと思う。行動食についても、同様の荷揚げを行った。なお、C 3 には必要分だけの食料を泊まるパーティがその都度、荷揚げした。

[\[ページのトップへ\]](#)

7. 全体を通じて

過去の遠征隊の報告書が大変参考になり、イメージどおりに事が運べた。今回は、キャラバン食、BC食はエージェントに任せたが、ラウルピンディーのラジャバザールでは、大抵のものは揃う。食料係は、高地食をどの程度贅沢にするのかによって空輸量が変わり予算に響くので、この点を押さえておけばよい。大抵の隊員は向こうに行くと体調を崩し体重が減るので、日本にいるときに栄養価のあるものを食べておく方がよい。

[\[ページのトップへ\]](#)

渉外報告 (清水)

Contents

1. [ビザ](#)
2. [渡航](#)
3. [保険](#)
4. [エージェント](#)
5. [輸送](#)
6. [リエゾンの装備](#)
7. [連絡先](#)

1 . ビザ

登山目的ではあるがパキスタン入国に際し観光ビザが必要。東京のパキスタン大使館で手続きできるが、今回遠征参加者に東京在住者がいなかった為、札幌の旅行会社に代行手続きを依頼した。

[\[ページのトップへ\]](#)

2 . 渡航

行きはPIAの直行便でイスラマバードまで(成田発、北京経由)。帰りは同じくPIAでカラチ発バンコク・マニラ経由の成田行き(イスラマバード～カラチ間は国内線利用)、往復一人126,000だった。

直行便は人気があってなかなか予約が取れないので、特に夏は早めに動く必要がある

[\[ページのトップへ\]](#)

3 . 保険

東京海上火災保険代理店の山谷氏を通じて保険契約を行った。期間2ヶ月で以下の内容。一人40,280だった。

死亡・後遺障害	150万円
傷害治療	100万円
疾病	60万円

4. 現地エージェント

短い期間で円滑に行おうとしたため、現地での渉外は少々値段が高くても信頼のおけるエージェントにサポートしてもらうことにした。今回我々が依頼したエージェントはNazir-Sabir-Expeditionである。以下の内容を依頼した。

1. 別送貨物の通関手続き
2. スラマバード、移動中での宿泊の手配
3. 隊員の送迎
4. 現地での食料・物資購入のサポート
5. 観光省でのブリーフィング、外国人登録のサポート
6. 輸送、移動手段の確保（ジープ、ミニバス）
7. 低所ポーターの雇用
8. ガイド、コックの手配
9. B C用品のレンタル
10. B C、トレッキング中の食事の用意
11. ポーター、リエゾンのための保険加入手続き
12. 他、あらゆる情報提供

現地ですべてこれといったトラブルも無く、面倒な作業を任せきりにすることができたので登山活動に集中することができた。しかし、経験者が隊にいれば、さらに依頼内容を絞る事ができ安上がりになるだろう。

5. 輸送

PIAでは機内持ち込みを一人20kgに制限しているので(超過料金は2,300円/kg)、持ち込めない分は別送した。

荷物別送の手続きは千歳空港の日通航空に依頼した。1kgあたり980ほど、内容、梱包方法にいろいろ制約がある。イスラマバード空港止まりで引き取りと通関手続きは現地エージェントに依頼した。7/13に千歳空港に持って行ってイスラマバードの滞在先のホテルで受け取ったのが7/24であった。観光省の正式な登山許可があれば関税はかからない。

船便だと格安大量に送れるらしいが、前もって準備する必要がある。パキスタンの場合カラチ港まで取りに行くことになる。

日本に送り返すときは内容品の英文リストを作って梱包し、手続きはすべて現地エージェントに依頼した。到着空港は国際空港なら日本中どこでも指定でき

る。帰国20日後、千歳空港にて受け取った。

別送は、高額な上、輸送途中で中身を荒らされるリスクがあるので、なるべく手荷物での持ち込みと現地調達に努めるべきだと思う。

[\[ページのトップへ\]](#)

5. リエゾン・オフィサー

6000m以上の高所登山には観光省の指定するリエゾン・オフィサー(連絡将校)の同行が義務づけられている。我々の担当となったのはジャウエイド・イクバル氏という、来日経験もあるイスラマバード在住の退役軍人であった。人柄も良く遠征の遂行に際し、できるだけの協力をしてくれた。

リエゾン・オフィサーには装備・食料等定められた待遇を与える義務があるが、協議の結果、以下の条件で決着した。

- 二人用テント、プルオーバー、アノラック、手袋、毛靴下、リュックサック、ピッケルの現物支給
- 靴、寝袋、ジャケット、ゲートル等を支給しないかわりに \$ 500を支払う
- 宿泊費として \$ 200の支給
- 山行中の食料費として \$ 270の支給
- 身の回り品購入のための \$ 150の支給

なおBCでは我々と全く同一の食事をとってもらった。

[\[ページのトップへ\]](#)

連絡先

参考までに利用した各機関の連絡先は

名称	依頼事項	連絡先
千歳日通航空	国際貨物輸送	0123-26-0505
ツアープラザ・ノマド	ビザ・航空券の手配	011-261-2039
山谷保険事務所	登山保険の加入	011-521-4281
Nazir Sabir Expedition	現地エージェント上記の事項	P.O . BOX 1442 Islamabad—Pakisutann Fax:(Pakisutan)92-51-250293
M.L.M.systems	EPIボンベの購入	(UK):Ty Gwyn Nant Peris Gwynedd LL55 4UE

注:イギリスの事務所に送金しパキスタン(イスラマバード)のBaltistann Toursという提携先の事務所で受け取るシステム

会計報告 (清水)

収入

山の会関係援助金	/849,994
隊員出資金	/2,724,221
合計	/3,574,215

支出

国内

隊員用共同装備購入費 (薬品類含む)	/59,766
リエゾン用装備購入費	/103,514
食料購入費	/57,232
貨物・輸送費用 (梱包、保管、ガソリン含)	/109,104
事務通信情報収集費用	/34,169
登山手続費用 (旅費含む)	/223,850
保険費用	/241,680
渡航費 (航空券、ビザ取得)	/763,132
修理代	/4,700
雑品購入費	/24,339
諸経費	/84,741
合計	/1,706,227

国外

現地エージェント関係支出	\$ 16,264
リエゾン関係支出	\$ 1,120
ガイド・コック特別手当	\$ 500
貨物・輸送費用	\$ 663
環境保護基金	\$ 200
食料物資購入費	RS 8,120
滞在費	RS 26,062
先発隊活動費	RS 12,918
事務通信費	RS 1,362
	1 \$ (米ドル) = /90.44
	1 RS (パキスタンルピー) = /2.91として
合計	/1,836,684相当
支出総計	/3,538,321

残金

/31,304

「パキスタンでの登山を終えて」 清水 徹

登山とは、あらゆる趣味道楽の中でも世間からかなりの厚待遇を受けた遊びであると思う。登山という行為そのものが若者の純粋な冒険心、自然への畏敬を表しており、山男というだけで一種完成された人格者であるかのような評価を受けたりもするからだ。

しかし、6年間登山をやってきた私に言わせれば、山男という種類の人間が他の人間集団と比較してさほど特別なものだとは思わない。山という対象にひたむきに打ち込むその姿は外から見れば確かに美しく純粋に映ると思う。しかし、その集団の内面は他のいかなる団体と同様に多くの泥臭さに満ち、登山という行為に伴う最大の困難は、体力でも気象条件でもまして時間や金でもなく、相当あくの強い山仲間達との人間関係に付随する辟易との闘いであった。それが正直な感想である。

それはさておき、ヒマラヤの自然は素晴らしく美しかった。薄い空気の中、青というよりも紫がかった広い空の下で6000m級の山々が周りに広がり、さらには自分がその天上界のような場所の、その1つの頂に立っているのである。世界にはこのような場所があるのだ。登山という世界に足を踏み入れていなければ決してこのような感慨をもつことなかった筈だ。地上の喧騒のなかでそれなりの喜びや感動を見出し、それで終わっていたことだろう。また、麓のパルガム村の絵に画いたような美しい風景、時の流れが止まったかのような人々の暮らし、子供達の純朴さ、好奇心に満ちた目。その当時を思い出す度に自分がかげがえのない体験をしてきたことを実感する。

二度も病気で倒れ、それなりにひどい目にも会ってきた。しかしパキスタンという国は不思議な魅力に溢れた国だ。足を運ぶ度に違った顔や趣で迎えてくれるような気がする。ファキールやゴルザール、パルガム村の住人達が相変わらず達者に暮らしていて欲しいと思う。しばらく時間を置いて必ず再訪してみたい。

「フンザ観光」田中 健太郎

準備中

「無題」三瓶 修

チトラールのマウンテン・インの中庭からティチミールを眺める。ヒマラヤに來たんだという気持ちが少しずつ実感となり始める。山が見えるばかりではない。たまたま同宿となった韓国の登山隊が、その山で遭難を起こし引き上げて來ているせいだ。リーダーと思われる人以外は食事にも出てこず、部屋に引きこもっている様子である。リーダーは本国との連絡のためか、電話のそばでうなだれている。いいも悪いも、山が近くなってきた。体の調子は悪くない。明日はいよいよブニ・ゾムが見られる。

自分の1995年は、阪神大震災で始まった。朝まだ暗いうち、それは起きた。近所の火災の現場に消火器を持って走ったり、バケツリレーをしたかと思うと、今度は山が崩れて埋まった家のがれきを取り除きに行ったりした。自分の住んでいた寮はガス、水道が止まり、いったん避難するという形になった。昨年から関学の教授として近くに来られている白浜先生も無事だったようだ。会社と寮で、もめにもめた後、結局寮は廃止されることとなり、引っ越し、その他慌ただしい日が続いた。本当なら体を作っておかなければならない冬から春にかけてを、そんなこんなですごし、ぼーっとしている間にパキスタンまで來てしまっていた。後はやるだけしかない。

ジープの中からはるか高い位置に初めてブニ・ゾムを見上げる。だんだん気持ちが昔に戻ってくる。一年目の頃、二年目の頃、確かにこういった気持ちで山を見上げていたように思う。いつの頃か、忘れてしまっていた。でも今この時だけは、少しだけ思い出したような気がする。きっと、また日本に帰れば、日常の慌ただしさの中ですべて忘れ去ってしまうのだろう。

ポーターを雇いキャラバンが始まる。今日は空身なら2時間位の行程だが、荷物を担いでくれる彼らのペースで1日かけてのんびり歩く。30人ほどいる彼らは、下はまだ小学生くらいから、60をこえていそうに見える人まで村中の男たちと言った印象だ。一緒に歩いていると、何をくれ、あれをくれと話しかけてくる。あらためて、自分がなぜ山に行くのか考えさせられる。今回アレンジしてくれた会社は、自分らのような人間から金を取って、暮らしている。荷物を担いでいる彼らは現金収入を得ようとし、また何かもらえないかいろいろねだってくる。自分は山に行くために会社に勤め、そこそこに仕事をしながら週末を待っている。神戸の公園では、その仕事のために郊外に移れない人達がいまだにテントで寝泊まりをしている。何が先で、何が後とか、結局は価値の問題と片づけられてしまうのうのうだろうが、考え込んでしまう。夢とそれに伴った意志だけで走れるうちはいいが、夢も意志もどこかに置き忘れた今となってはなかなか難しい。ポーターの中の中学生か高校生くらいの子たちと、ボルダリングをする。彼らは体が柔らかく、なかなかうまい。登れるととてもうれしそうだ。自分も登れればうれしい。そこには理屈はない。とりあえず今は、夏の夜の夢に身を任せるのである。

斎藤と本多と3人でクラクマーリの滝を試登する。滝のすぐ左側は3級くらいの岩場が延々と続いている感じだが、上部の様子はよく分からない。以前のパーティーの報告では、ザイルが必要なのは1ピッチだけという話だから、ここがルートであるとは思えないが様子を見にとりあえず上がってみよう、ザイルを出す。1ピッチ目、岩場自体はスニーカーで登れる容易なものだが、浮石が多く荷揚げのためのルートにはとてもなりそうもない。ザイルピッチも相当



な長さになる。様子が分かるところまで上がろうとさらにザイルを伸ばすが、見通しはたたず、ただアップザイルのハーケンとシュリングだけを無駄にして下降することにする。目的が違うが、この程度の易しい巨大な岩壁の中を、ザイルを結んでルートを探し回るのは楽しい。日本にあれば、あみだくじのようにルートが交錯する中を正しいルートに導いてくれる残置ハーケンを目を皿のようにして探す事になるだろう。この上に雪と岩の壁と、とがったピークがあれば最高だ。下降をしながら小さくなったベースキャンプを見おろす。いよいよ始まりである。ベースキャンプに戻りながら、ルートを探す。滝よりだいぶ下の小さなかぶりぎみのルンゼから急なガレ場へと続くラインがどうやら上へ抜けられそうな様子だ。ここでルートが見つけれなければ、雪に触ることもできずに終わってしまう。明日は斎藤とシェイクでルート工作である。

ルンゼの中に張られたフィックスをユマールで往復する。たかだか100メートルちょっとだが、荷物のせい、消耗する。自分に与えられているチャンスは休みの都合で短いので、前半に出来ることは頑張っておかなければならない。上では、斎藤と辺見がそろそろC1に到着する頃だろう。みんなにここまで連れて来てもらった。体の調子も悪くない。ハイライトも吸えるし、もう一往復しておこう。

みんなでC1に入る。荷揚げで往復したガレの末端からフィックスを伝って急なガレをつめる。左にはクラクマーリの滝が激しさを見せている。この水の元となっている氷河がもうすぐ姿を見せるはずだ。そこがC1である。氷河の上を水がちょろちょろ流れている。生のまま飲める水がうまい。今日はあいにく雲が多いが、斎藤と辺見と偵察に向かう。歩き易い氷河だ。アイゼンも要らない。小さなクレバスが幾つか開いているが、特に問題になるような所はない。コラボルト・ゾムの尾根末端辺りから、もろい岩稜を従えて目指すブニ・ゾムが姿を現した。西稜から南側は、黒く光った岩に、所々雪がバンド状にへばりついている。岩が硬ければ、なかなかのバリエーションができるだろう。南峰は本峰からはほとんど独立していて、その間はキレットになっている。まだ予定のルートは見えないがとがったピークは十分に魅力的だ。もう少し雲が避けてくれればもっとよく見えるだろう。ピークについても雲のほうが高いに決まっているのだが、高さへのあこがれは、やはり雲より高いところに上がりたいというところにあるような気がする。飛行機でなく自分の足で。自分の足で行けるとところで、雲より高い所なんて現実には有り得ない。たとえ8000メートルまで登ってもやはりその上には雲がある。その有り得ない存在を目指すのも山に登っている意味の一つなのかも知れないと思う。ピッケルをぶらぶらさせ、うだうだとらちもないことを考えながら適当に帰る。

C1からC2へ荷物をあげる。だるい登りだ。ほとんど何も考えていない。大した距離ではないし、荷物特別重いわけじゃないが、ただひたすらだるい。広い氷河の上に点々とみんなが見える。みんなきっと何も考えてないに違いない。いい加減いやになった頃に、C2に到着する。懸垂氷河が正面に見える。コルからピークは幾つかの岩峰を抱え、なかなか手ごわそう。韓国隊の命を奪ったティリチミールの姿が遠くに美しい。どこから登っても難しそうに見えた。

いよいよアタックである。懸垂氷河がようやく傾斜をおとしはじめたところに、雪を削って作ったC3を斎藤、辺見と3人で出る。この高さに泊まるとさすがに少し頭が痛い。階段状になった雪の上にアイゼンの歯をたてて登る。コルに出る。日高の稜線に出るような感じが、初めて帯広の灯が見えたように、



反対側の山々が望めた。コルから見上げる本峰は鋭い雪稜と大きな岩稜を抱え、とてもノーザイルでは届きそうにない。斎藤を先頭に進むがポコを一つ越えたくらいで、雪面が広い範囲で音をたてた。慌てて間隔を取る。一人ずつゆっくりとポコの上に戻る。残念ながらこれ以上進むのは無理だ。コルに戻って北峰に転進する。易しい稜線を進む。小さな岩を越えて6338メートルのピークに立った。そして自分のブニ・ゾム遠征は終了した。

ベースキャンプで最後のアタックに向かう斎藤、本多、清水、辺見、シェイクを見送る。見慣れたクラクマーリの滝も、もうこれで見納めになる。後はアタックの成功を祈るだけだ。また来る事があるだろうか、これからの自分の山登りはどこに行くのだろうか。何か変わったのか。まだ何も分からない。

「顕花植物の分布」 本多

準備中

「ブニゾムの岩石」 斎藤

準備中

協力者芳名録 (五十音順、敬称略)

朝比奈 英三・荒生繁雄・有馬 純・石川 守・石田隆雄・石橋英二・今村昌耕・今村正克・岩崎祐三・上野八郎・AACH関西支部有志・遠藤禎一・大井幸雄・大内論文(つる)・大賀 皓・岡田勝英・梶川耕司・河合範雄・岸本正彦・清原 実・小枝一夫・木幡 貢・小泉章夫・小林 年・斉藤惇夫(AACK)・坂田正勝・佐々木 幸雄・志賀弘行・芝山良二・芝山敏子・下沢英二・杉野目 浩・鈴木弘泰・高篠和憲・高橋孝三・高松秀彦・滝沢政治・多田貴久・東洋水産株式会社・中島秀雄・中村晴彦・中村雅人(スワロー会)・西 信三・西 安信・丹羽由紀夫・野田四郎・橋本正人・花井 修・東 晃・広島三朗(神奈川ヒマラヤンクラブ)・藤木忠美・北大山岳部現役の皆さん・前田仁一郎・松田 彊・水上定一・宮地隆二・柳沢盛雄・山口 隆・山口義明・山田真弓・吉田充夫(JICA)・吉谷川 泰

回想（最後に）

齋藤清克

製本版報告書の巻末より

学生時代最後にヒマラヤに行きたくなかったので、隊をつくって行った。振り返ってみると、我々にはなんでも経験してやろうという意気込みだけが強かった。全員が無事下山できたのは北大山岳部で培った隊員全員の有機的つながりと、各自の普段の国内山行の積み重ねから得た自己調整能力に負うものである。登山の結果は、主峰の登頂こそ逃したものの、北峰には全員が登頂できた。苦しみぬいて切り拓いた今回のルートには各自が思い思いの満足感を得た。また全力で目標に向かう面白さを味わった反面、これまでの経験の域を超えたスケールで要求される技術力、判断力に愕然とし、自己奮起するキッカケともなった。

あらためて、登山の醍醐味とは未知のものを探り究めようとする自己本能の表現にあると思った。今後もこの経験を登山と限らず各方面に生かしたい。

最後になりましたが今回ご援助くださった関係各位、先輩諸兄に厚くお礼申し上げます。

（編集委員会） 齋藤清克・田中健太郎・本多和茂

Web版 編集 T.Sawagaki